

活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第17号/平成19年12月27日発行 青森県立保健大学広報誌



大学祭



韓国仁済大学校との協定締結



現代GP



韓国仁済大学校への派遣

C O N T E N T S

現代GP	2	特別講義	16・17
大学祭	4	平成19年度研究センター活動報告	18
サークル活動	6	平成19年度教育センター活動報告/研修科	19
高大連携	8	平成19年度教育センター活動報告/国際科	20
仁済大学校との協定締結	10	公開講座	21
仁済大学校への派遣	11	eラーニングコンテンツの開発状況	21
就職関係	12	保護者(後援会)懇談会	22
卒業生から	13	図書館の利用状況等	22
全国学会	14	出張講義及び大学見学状況/入試案内	23
大学院関係・博士論文中間発表会	15	編集後記	24

現代GP —下北地域を元気にする参画型教育— 下北地域に密着した学習 —19年度の活動報告—

副学長 上泉 和子

『現代GP —下北を元気にする参画型教育—』は、今年度で3年目になりました。この取り組みは、本学の教育の一部を下北地域で展開し、地域の住民を元気にすることができる人材を育成することで、学生の現地での学習活動を保健医療福祉の包括的ケアの向上に繋げようというものです。今年度は1年生から4年生まで、6科目について下北地域で実習や演習を展開しました。また、教員は、研究活動や研修会講師などの活動を通して、下北地域の保健医療福祉専門職の資質向上、あるいは地域住民の方々の健康の向上にむけて支援してきました。

また、今年度は本プロジェクトの中間評価の年でもあり、9月には中間報告会と評価会を開催しました。19年度も多くの活動を下北地域で展開してきましたが、4年間のプロジェクト後半は成果をどのように示していくか、そして本プロジェクト終了後の科目展開のあり方、下北地域への支援のあり方を考えていく予定です。

1. 下北地域における演習、実習科目の展開

1) 下北地域での科目の展開

19年度は下の表のように、下北地域で6科目の演習、実習が行われます。

1年生は保健福祉概論という全学科合同科目ですが、今年度は風間浦村の下風呂地区に約170人の学生、教員が出向き、2泊3日にわたってフィールドワークを行い、健康の概念、生活者主体の保健福祉活動の考えかた、多職種との「連携」の必要性などを学習しました(写真1)。2年生では人間総合科学科目の選択科目ですが「科学と創造」の授業を下北で行います。これは12月に予定しています。3年生は、理学療法学科の

	1年生	2年生	3年生	4年生	
看護学科	保健	科学と創造		地域統合実習	ケアマネジメント 論演習
理学療法学科	福祉	(人間総合	地域理学療法学		
社会福祉学科	概論	・選択)	医療福祉概論		

表 下北地域で開催される科目

地域理学療法学、社会福祉学科の医療福祉論Ⅰが下北で実施されました。4年生では、看護学科の地域統合実習が下北地域の1市4町村で行われました。また、全学科の合同科目であるケアマネジメント論演習は、下北地域と青森地域にてフィールドワークを行いました。120人は東通村、風間浦村、大間町、むつ市で実施しました。フィールドワーク終了後、情報を整理したりケアプランをたてるために、宿泊所で遅くまでディスカッションしました(写真2)。

下北地域の多くの住民の方々、保健医療福祉の専門職の方々にご協力、ご支援いただき交流を深めながら科目を展開してきました。関係者の方々には心から感謝いたします。20年度もこれらの科目については同様に下北で演習や実習をすることになります。どうぞ積極的に現代GPの取り組みに参加してほしいと思います。



写真1 保健福祉概論 風間浦村でのフィールドワーク

写真2 ケアマネジメント論演習
フィールドワークの結果を整理

2) カリキュラム改定への反映

今年度は、平成20年から改訂されるカリキュラムに、この取り組みの結果を反映させるということも検討してきました。その結果、新カリキュラムでは保健福祉概論は「健康科学概論」「健康科学演習」に、ケアマネジメント論、ケアマネジメント演習は、「ヘルスケアマネジメント論」「ヘルスケアマネジメント実習」に変更します。

2. 教員による研究、教育・研修活動

地域貢献部会は過疎化の激しい下北地域において、研究と教育活動を通して住民の方々が穏やかで健康な生活を送ることができるよう、関わってきました。主な事業としては、1) 地域で支えあうリハビリテーションアプローチ、2) 健康教室の開催などによる健康寿命アップー佐井村での展開、3) 健康寿命アップのためのリスク研究、4) 血液サラサラ検査（血液流動性検査）が健康意識に与える影響、などの研究が行われました。

教員による研修会などでは、NPO法人むつ下北子育て支援ネットワーク「ひろば」主催の『ママのための子育てプチゼミ』において、中村由美子教授が講師を務めて10月までに9回開催されました（写真3）。また理学療法学科の川口徹准教授によって、学生も参加し「佐井村介護予防一元気塾－元気発見 みんなで実践」が6回開催されました。

本事業で芽生え、醸成されつつある「連携協力の輪」が益々強固に発展するよう、担当者一同願っています。



写真3 ママのための子育てプチゼミ（下北地域センターにて）

3. 現地での活動支援

現地対策部会は、下北地域で展開する授業、研究、研修を支援するため、環境作り、調整など、下北地域センター（むつ市）を拠点として、幅広く事業を展開してきました。

テレビ会議システムを活用した遠隔授業、研修では、今年度から大間町の大間病院に遠隔テレビが設置され、ケアマネジメント論演習で現地と大学を結んでテレビ会議を行いました。

市民の方々を対象にした公開講座は、むつ市にて1回開催され、2つのテーマで講演が行われました（写真4）。その他、「ケアマネジメントフォーラム in 下北」、「下北地域における教育研究活動推進会議」「包括ケア学習会」などを開催しました。



写真4 むつ市にて開催された公開講座

おわりに

今年度は中間評価の年であり、中間報告会、中間評価会が、9月21日に開催されました。埼玉県立大学教授の大塚真理子氏による基調講演の後、下北地域の保健医療福祉の専門職の方々から評価をいただきました。この評価の結果は、次年度の計画に反映させていきたいと思っています。現代GPプロジェクトは20年度が最後の年になりますので、21年度以降の下北地域での本学の新たな展開の方向を模索していきたいと思っています。

第9回大学祭を振り返って

はじめに

第9回青森県立保健大学大学祭は10月6日(土)、7日(日)に開催されました。

今年のテーマは、「笑(わらい)」でした。みんなの笑顔がみたいという思いをこめて、このようなテーマにしました。

今年の大学祭は二日間とも天候に恵まれ、全日程をほぼ予定通り行うことができました。これも、皆さんの日頃の行いの良さ、大学祭を成功させたいという皆さんの思いが届いたからだと思っています。

実行委員会による企画には以下のものがありました。

- オープニングセレモニー
- 園児絵画展示
- オープンキャンパスアゲイン
- 縁日
- 安生園との交流会
- スタンプラリー
- ビンゴ大会
- 中夜祭
- 後夜祭

この他に、バンド演奏やフリーマーケット、作品展示などのサークル企画や模擬店、教員・学生による展示・発表もありました。外部企画として、日本原燃によるエネルギーコーナーや6つの施設による展示即売会、笑いに関する講演が行われました。



縁日

大学祭実行委員長(理学療法学科3年) 北沢 泰

広報活動では、企業への連絡や協賛金の依頼を行い、昨年よりは少ないですが、約30の企業から協賛して頂くことが出来ました。また、パンフレットとポスターも、テーマ「笑」に沿って、素晴らしいものができたと思います。しかし、パンフレットが完成してからミスプリントを発見したり、新企画が追加されてしまい大変ご迷惑をおかけしました。

大学祭を振り返って

無事に二日間の日程を終えた今年度の大学祭ですが、もちろん何の失敗や事故も無く終わったわけではありません。特に中夜祭では、ビデオ上映の途中に画面が映らなくなったり、賞金を間違えるなど、これらは実行委員会の事前の準備の不足や連絡不足が招いたものです。ご迷惑をかけた方々には、この場を借りてもう一度お詫び申し上げます。

ですが、全体を通してみると、大きな問題が発生することもなく、無事終わることができたと思います。大学祭に関わってくださった皆さん、本当にありがとうございました。



オープンキャンパスアゲイン

今、思うこと

僕が大学祭実行委員長になったきっかけは、実は「じゃんけんで負けたから」でした。はっきり言って、こういう大きい責任がかかる仕事はしなかったし、大勢の人の前に立つのは苦手だし、前歯ないし、リーダーシップがあるわけでも

ないし、他にも理由はありますが、とにかく初めのうちは大学祭のこと、自分が実行委員長であるということなどを考えては、頭を抱える毎日でした。でも、いつまでもこうしていても何も始まらない、大学祭を楽しみにしている人たちの期待を裏切りたくないと思い、ある種の使命感に駆られ、委員長として活動し始めました。

このように始まった僕の大学祭実行委員長としての半年ですが、今では委員長になれて、あの時じゃんけんで負けて、僕はラッキーだったなあと思っています。委員にならなければきっと名前さえも知らずに卒業していただろうと思われる人たちとも仲良くなることができましたし、人の上に立つことの責任や苦悩、重圧を感じ、まただからこそ感じるができる達成感や感動があることを知りました。本当に実行委員長になれてよかったです。



中夜祭

実行委員の皆さん、ボランティアでお手伝いしてくれた皆さん、こんな頼りない委員長でしたが、「いいんちょー」と呼んでくれて、ついてきてくれてありがとう。無事、大学祭を終えることができたのは、皆さんが夏休みやその他の貴重な時間を割いて、寝る間も惜しんで活動してくれたおかげだと思います。僕と同じように、くじやじゃんけんで委員になった人が多かったみたいですが、最後まで投げ出さずに自分たちのやるべきことをやってくれたこと、感謝します。

また、大学祭に関わり、力を貸していただいたリポウィッツ学長はじめ教職員の方々、様々な方面でお世話になった学外の方々などすべての方に感謝申し上げたいと思います。そして、大学祭に参加してくださったみなさん、準備不足でいろ

いろ迷惑をかけてしまった部分も多かったと思いますが、今年は模擬店の出店も多く、積極的に参加していただき、また、サークル企画などで大学祭を盛り上げていただき、ありがとうございました。

今年度のテーマは「笑（わらい）」でした。みんなの、あなたの笑顔がみたくてこのようなテーマに決定し、「人を笑顔にするためにも、まずは自分が笑顔でいること」をキャッチフレーズに実行委員一同活動してきました。しかし、仕事が忙しく、その疲れがあったり、様々なトラブルがあったりしてなかなか笑顔でいることはできなかったかもしれません。この点は残念に思いますが、心の中では皆さんの笑顔を願っていたことは確かです。

参加してくださった皆さんは、いかがだったでしょうか？笑顔でいることができましたか？もし、そうだったら、半年間準備をしてきた甲斐があります。これからも、大切な人の笑顔をみているために、自分自身が笑顔でいてほしいと思います。



大学祭実行委員会メンバー

おわりに

今年度の大学祭が終わった今、僕らにできることは、来年以降のために今回得た経験や様々なノウハウを伝えることです。来年の実行委員会の方々には、これらを活かして、特に来年は大学が開学してから10周年の節目の年なので、今年以上の大学祭にしてほしいです。

最後になりますが、もう一度、今年度の大学祭に関わってくださった全ての方に、心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました！！

野球サークル

(顧問 / 大竹昭裕 准教授)
理学療法学科3年 遠藤 康裕

～We Love Baseball～

はい、軟式野球サークル「ZERO」です。

私たちは野球をこよなく愛するメンバーの集まりです。野球経験者から未経験者まで、そしてマネージャーも含めて楽しく活動をしています。高校野球での無念を晴らそうとするもの、久しぶりの野球を楽しむもの、野球を経験してみたいと思うものなど思いはさまざまですが、野球を好きな気持ちは同じです。

ZEROは青森市の軟式野球連盟に加盟し、社会人に混ざり種々の大会に参加しています。今年度は3つの大会で代表決定戦に進出しました。東日本軟式野球大会では青森市予選を勝ち抜き、代表として県大会に参加し、みごと県大会優勝を飾りました。その結果、来年5月に静岡県にて行われる全国大会の出場権を得ることができました。週2～3回の練習ですが、みんなの気持ちが一つになり、野球を楽しんだ結果だと思えます。

活動は毎週木曜、土曜、日曜で主に野球の練習ですが、練習の一環として他のスポーツを楽しんだりもしています。サークル活動以外にもメンバーとの付き合いは多く、BBQやキャンプ、学祭の模擬店出店などなど楽しいことがいっぱいです。昨年度は雪合戦に参加し県ベスト5に入ったりもしています。先輩と後輩も仲がよく、勉強内容など学内での活動にも役に立っています。

メンバーはみんな本当に楽しい人ばかり。来年は全国大会を含め、その他の大会でも少しでも多く勝てるよう練習に励んでいきたいと思えます。応援よろしくお願ひします。

“最高の仲間と 最高の時間を 最高の思い出を白球とともに…” とかなんとか…



祝！県大会優勝！！

バスケットサークル

(顧問 / 角濱春美 准教授)
看護学科3年 小山内 鮎美

私たちバスケサークルは、毎週火曜と金曜の二回活動しています。バスケを通じて、健康を維持したり、他の学科や学年の人たちとの交流を図ったりすることが活動の目的です。

主な活動は週に二回、体育館でバスケをして汗を流すことです。経験者も未経験者も先輩も後輩も問わず、全員で楽しくバスケをしています。部活のように厳しいものではなく、みんなで和気藹々とした雰囲気です。年に何度かは学内の人だけではなく、他の団体と練習試合も行い、新しい刺激を受けて技術の向上につなげています。大学祭では3on3やフリースロー大会などを実施し、日ごろ鍛えている腕を披露しています。

また、バスケサークルにはイベント好きな人がたくさんいるため、春にはお花見をしたり、夏にはみんなでキャンプに行ったりと季節折々の催し物も盛りだくさんです。今後も機会のある限り計画をたてていきます。

バスケサークルでは、どんな人も歓迎しています。もちろんマネージャーでも構いません。一緒にバスケをしたり、イベントを企画して遊んだりして楽しくやっていけたらと考えています。「バスケサークルに入ってよかった、楽しかった」と感じてもらえるサークルを目指して、これからも切磋琢磨して活動していきます。



サークルメンバーです！

高大連携事業について

健康科学部長 佐藤 秀紀

一昨年から保健大学と青森東高校との高大連携事業が開始されています。

この事業は、大学における授業を実際に体験することで、生徒さんが、より具体的に本学についてのイメージを持っていただくためのものです。また、高校とは異なった講義を聴講することで、いろいろな学問への興味や関心を深めてもらうことを主旨としています。

19年4月9日、「高大連携」事業開講式を実施。受講生は、2年次生23名（男子2名、女子21名）でした。生徒の受講科目は、「グローバル社会と文化」「医療人類学」「理学療法原論」の3講座で、一人1講座を受講としています。開講時間はいずれも6時限目（17：10～18：30）とし、高校の授業終了後に受講できるようになっています。期間は4月から7月までとし、受講料は両校間の合意で無料としています。

19年7月27日、「高大連携」事業修了式を実施。23名全員が本学学生とともに学び、修了後に高校の単位として認められました。

この講義は高校生用にアレンジされていない大学の通常のもので、レポートの提出など、高校生にとってかなりハードな内容であったものと思います。にもかかわらず、全員が修了できたのは、受講生徒の意識の高さと努力があったからこそだと思います。

3年間実施していますが、高校側の教育活動に定着してきたものと思われます。本年度は、3講座での受講でしたが、アンケートなどで、生徒さんの希望をとりながら、今後、可能な限り受講科目を増やしていきたいと思っています。

高大連携科目における問題解決的探究活動

人間総合科学科目講師 浅田 豊

本講義では、受講生の講義への主体的な参加をベースとしながら、現代社会を地球的観点から捉え、国際社会の構造的変動と機能集団の多様化に伴う社会・文化的環境の変化の諸相を考察するこ

とを目的としました。また、実践知の共有・体系化を目指し、自己の文化を様々な異文化と比較する視点を涵養するとともに、グローバル化する社会における現代的な諸課題について、今年度青森東高校生6名の参加を得て、計13コマの中で考察してきました。

実際の教授・学習過程では、グループワークや学習成果発表（プレゼンテーション）を含む双方向的な授業を心がけながら、国際化への対応・地域社会への貢献という本学の教育理念に基づき、国際人としての資質の向上を目指した授業設計を行いました。

受講中の本学学生・高校生たちには、相互交流等を通じて、認知・情意の各領域において、「学習課題や対象を意識的に明確化する」、「既習内容を段階的に積み重ね、要約・比較・置換・推測・応用といった作業を行なう」、「科学的データに基いて検討・分析を行なうとともに、設定した基本的仮説をグループ討議等により検証する」、「自分の身に付けた価値観を概念化・組織化し、当該テーマについて自らの考えを述べたり発表を行なう」、「一定の基準に基いて、複数の見解の中から、最適なものを選択する」等を達成することを評価基準として設定しました。高校生を含む各受講生には、概ね十分な学習の結果が、各種成果物や提出物等から観察することができています。

次年度以降もさらに充実した高大連携科目の運営を行ないたいと考えています。



修了式における学長からのあいさつ

高校生とともに学ぶ

看護学科教授 大関 信子

私はロンドン大学大学院で医療人類学を学び

ました。入学当初、日本にはない科目なので、どのようなことを学ぶのかとても楽しみでした。近代医学の他に、地球上には地域の自然環境や文化の中で育まれてきた伝統的医療も現在に脈々と息づいています。健康を取り戻す知恵、新しい命を迎えたりする儀式等、人間がよりよく生きるために伝えられている慣習を理解することがよりよく生きるための知恵だと考えます。

私の学生時代は、講義よりもセミナーが主でした。セミナーの準備には2-3日を要しましたが、10人程度のクラスメートと教員が提示したトピックについてディスカッションするのが楽しみでした。特に、年が離れていたり、日本には馴染みのない宗教や国籍を持つクラスメートと交わることが大変興味深く、知的好奇心をそそられました。生老病死にまつわる儀式やタブーなどを聞き、その多様性と普遍性には驚かされました。

受講生にもこのような体験をしてもらいたいと考え、エスノグラフィーの演習を発案しました。高校生と大学生、女性と男性、県内と県外というようにできるだけ自分とは異なる人とペアを組み、相手を「理解する」練習をします。言葉だけの理解では限界があります。五感を使って相手に興味を持ち集中することで、相手が見えてきます。高校生にとっても本学学生にとっても新しい発見があったはずで、この演習で、人間の奥深さ、多様性、普遍性を体感してもらえればと考えています。

少子化が進み、現在の日本経済を保持するためには2020年までに2200万人の外国人労働者が必要だと言われています。このスキルを身に付け、相手をよく理解することが次の時代をよりよく生きていくコツだと考えます。受講生には、これからも『人』に興味を持ち続けてほしいと願います。

高大連携授業を終えて

理学療法学科講師 盛田 寛明

理学療法学科の「理学療法原論」では、今年度、4名の青森東高校生を受け入れた。この授業では、理学療法の全体像や理学療法士としての資質など、基本的な内容を総合的・体系的に把握・理

解できることを目的とした。具体的には、理学療法の定義と歴史、対象と理念・倫理、方法論、職域、期待される人間像などについて概観することにより、理学療法各論を学んでいくための基礎をつくることを主眼とした。毎回の小テストやレポート、病院見学やグループ研究が課され、高校生にとって負担増となることを懸念したが大部分の受講生は大学生に負けず劣らず頑張っていた。病院見学では、実際の理学療法の場面に接することで、障害を持つ方々とその生活環境について理解を深めるとともにチーム医療における医療専門職種である理学療法士の姿を具に目にすることができ、高校生にとっては新鮮な体験だったであろう。また、特に苦勞したのはグループ研究とレポートであったのではないだろうか。自分で言いたいことを決め、資料を探して読み、整理して考え、発表して原稿を書くという過程を経る必要があったため、授業中に戸惑っていた場面も少なからず見受けられた印象がある。この、自分で疑問を追求し、問題解決する意識をもつことがこの授業の目標の一つでもあった。教師から教えられるという受け身でなく自分から主体的に考えていくことの重要性を、高校生は痛感したと思う。

高校と大学が円滑な連続性のある教育を行っていくためにも、高校生が大学レベルの授業内容に触れる機会が増加していくことは望ましいと考える。今後、「高校生にとっての参加のしやすさ」と「大学の各学問分野の特質に対する十分な理解」を両立させることができる高大連携プログラムのさらなる推進が望まれよう。



修了証書授与の場面

大学間での国際交流に発展

理学療法学科准教授 藤田智香子

平成14年から本学理学療法学科と韓国の仁済大学校物理治療科（日本でいう理学療法学科）とで、学科間の国際交流を開始しておりました。これは、以前より青森県理学療法士会と韓国の物理治療士会とで非公式に交流があったことを基盤として、本学の教育理念の一つであるグローバル化する地域・社会に貢献できる専門職の育成にも大きなプラスがあることから、関係者の尽力で実現したものです。以後毎年3年生が4名前後、仁済大学校からは4週間、本学からは2週間、お互いの大学を訪問し、専門的な分野での研修や学生間の関わりを通じて、国際交流を深めてきました。

5年経過した今年度は、両学科の学生に好評を得ていましたので、学科間の協定を継続して更新予定でした。その際順調に実績を重ねてきたこともあり、更新する際の締結内容について検討が加えられました。その結果、大学間での交流に発展させることが双方にとって有意義であるとの合意を得て、今回大学間の交流として協定を締結する運びとなりました。

仁済大学校は、医科大学、医生命工学大学、人文社会科学大学、自然科学大学、工科大学の5つの単科大学から構成され、米国をはじめ日本を含む外国の大学と盛んに国際交流を実施していま



写真1：仁済大学校で学生より歓迎の花束贈呈

す。もとより医科大学には看護学科が、医生命工科大学には物理治療学科が、人文社会科学大学には児童・社会福祉学科があり、理学療法学科以外の学科との交流の可能性もありましたが、諸事情により実現までには至りませんでした。今回機が熟したというか、諸条件が整い、好機を得て大学間での交流協定締結が実現したことは、両校にとって誠に喜ばしいことでした。

大学間での協定締結式は、今年の6月14日に仁済大学校でつつがなく執り行なわれました。仁済大学校総長を始め、副総長、学生部長、国際科長、物理治療学科学科長、理学療法学科教員等がご列席のもと、本学からは学長、健康科学教育センター長の石鍋圭子教授、理学療法学科教員の李相潤講師と私が訪韓し、参列してきました。協定書に仁済大学校総長と本学学長がサインした後、記念品として、仁済大学校から伝統工芸品の騎馬の置物（写真3）を頂き、本学からは津軽塗（七子塗）の丸盆とこぎん刺しのテーブルセンターを贈りました。



写真2：協定書にサイン(左：本学学長、右：仁済大学校総長)



写真3：仁済大学校から記念品贈呈

仁濟大学校との国際交流で学んだこと

理学療法学科3年 戸塚 あおい

私は、今年の8月に韓国仁濟大学校との国際交流のため、2週間韓国へ行ってきました。最初の1週間は病院で実習を行い、残りの期間は学校に通い、理学療法学科の学生と一緒に授業を受けました。当たり前のことですが、韓国の授業は日本で私たちが受けている授業内容とほとんど同じです。その当たり前のことが私にはとても嬉しく、私たちは国が違っても同じ理学療法士という夢に向かって一緒に頑張っているのだと改めて気づきました。学校の授業の後は現地の学生が韓国料理を食べに連れて行ってくれ、また週末には観光地を案内してくれました。

この交流を通して一番実感したことは、笑顔の大切さです。人とコミュニケーションする上で一番大切なことは、笑顔だと改めて学びました。私は韓国語がわからず、また英語が流暢に話せるわけでもありません。そのため、自分が唯一わかる韓国語の挨拶を笑顔でみんなにすることが精一杯でした。病院の先生や患者さん、学生たちも、私の挨拶に笑顔で返してくれました。それを見て、私もとても嬉しくなりました。また、私たちはどちらも英語を母国語としていないため、お互いコミュニケーションをとることが難しく、歯痒さを感じました。しかしお互いが、英語と自国の言語、自分が知っている相手の言語、ジェスチャー等、自分が持っている全てを使って、伝えたいことを相手に伝え、相手もまたそれを理解しようとしてくれました。私は、英語も韓国語も上手に話すことはできなくても、楽しい時間を一緒に過ごすことができるのだと実感しました。またこの交流は、他国を知るだけでなく、日本のことを考え直すよい機会となりました。学生のうちにこのような経験をすることは、非常に有意義なことだと思います。もし機会があったら、ぜひ参加してほしいと思います。



先生、学生たちと

ペク病院での実習

理学療法学科3年 深津 陽子

韓国に滞在した約2週間のうち、6日間仁濟大学校付属病院のペク病院で実習をさせていただきました。特殊療法を2日間、電気療法を2日間、水治療法を1日実習し、初日は午前中だけ作業療法の見学をしました。治療は朝8時15分から開始するため、8時には病院に着いていなければいけません。ホームステイ先から病院までが少し離れていたため、毎朝5時半に起きて準備をしなくてはならず、早起きが一番辛かったです。

韓国の病院は基本的には日本の病院と似ていますが、やはり少しずつ異なる点があり、それがとても興味深かったです。実習中は、それぞれの学生に担当のPTが1人ずつついて教えてくれるのですが、コミュニケーションは全て英語で行わなければいけません。通訳さんもいるのですが、学生3人に対して通訳1人なので、いつも傍にいるわけではありませんでした。病院実習が始まる前はちゃんとコミュニケーションがとれるかどうかとても不安でしたが、病院の先生方はみんな親切で、私が理解するまで何度も教えてくれ、私の下手くそな英語とジェスチャーでどうにか会話をすることができました。病院の雰囲気はとてもアットホームで、患者さんも私たちが日本人だとわかると、知っている日本語で話しかけてきてくれたり、治療に来ていた子どもたちと日本のアニメの話で盛り上がりたりと、実習はとても楽しかったです。違う国の人と違う国の言葉でコミュニケーションをとれたことで、自分に少し自信がついたように思います。実習では、ただ見学するだけでなく、患者さんに対して実際に治療を行うことができ、とてもよい経験になりました。この経験は保健大からの留学でなければ普通ではできない貴重な経験であり、一生の宝物になると思います。



ペク病院の先生方と

第6期生の就職活動最前線！

就職対策委員会

例年この時期になりますと、内定通知を得て安心する学生、これから本番と緊張して就職試験に向かう学生など4年生の就職戦線も佳境を迎えています。就職に対する意識を高めるため、3年次から、以下のような就職対策・支援事業を行っています。

1 学科別就職ガイダンスの開催

各学科の特性に即した就職指導を行うため、3年前・後期と4年前期に学科別に実施しています。就職指導カウンセラーを外部講師として招き、面接カード(エントリーシート)の記載方法や実際に面接指導をしていただきます。

2 就職合同説明会の開催

学生(3・4年生)が、病院や社会福祉施設の人事担当者と直接面談して情報交換をする場であり、高い就職率の維持、県内定着率の向上などを目指して毎年7月に開催しています。学生は多くの病院・施設の担当者から直接情報を得て、より自分に適合した就職先の開拓の場となっているようです。

3 面接・小論文試験対策

各学科の卒業研究担当教員、学科内就職対策チーム及び人間総合科学科目の就職担当教員が中心となり、面接や筆記試験等に落ち着いて冷静に臨めるように、模擬面接、小論文添削など、学生一人ひとりに個別の指導を行っています。

【6期生就職内定状況 単位：人】

H19.11.9現在

学 科	卒業予定者	就職希望者	就職内定者
看護学科	112	110	77
理学療法学科	21	21	4
社会福祉学科	41	39	8
合 計	174	170	89



就職合同説明会

今年度の就職支援とこれからの就職支援

就職対策委員・人間総合科学科目准教授 佐藤 伸

今年度の就職戦線も終盤を迎えています。11月時点の内定率は、学科により異なりますが、全体で昨年度より高くなっています。これは、今年度の学生の就職への意識が高いことを反映していると思われます。一方で、各学科の就職対策委員、卒業研究の指導教員、そして事務局担当者のきめ細かな支援と弛まぬ努力も忘れてはなりません。たとえば、就職対策委員会では、求人情報の提供、就職用パンフレット「HOPE 2008」等による就職情報の提供依頼、対策チームによる支援、就職ガイダンスの開催など様々な支援を行ってきました。

私自身は、就職対策委員並びに卒業研究の指導教員として学生の支援を行ってきました。私は一般企業に勤務した経験を活かし、面接時の自己PRの方法や小論文における志望動機の書き方など指導を行ってきました。その結果として、学生が希望する就職先の合格に結びつくことができたと思います。しかし、私の指導は微々たるものであり、合格に結びつくことができた最も大きな要因は、学生たちの専門職に対する意識の高さによるものと思います。

さて、就職は自分の意志でするものであり、大学を卒業したから当然するものではありません。自分が望んで社会に参加するということなのです。どのような形で社会参加をするか、その一つの方法が就職先を選択するということにつながると思います。

来年度から本学に栄養学科が新設されます。栄養学科の学生は、他の3学科の学生以上に職種・業種が多方面にわたって広がるのが考えられます。たとえば、管理栄養士として病院、福祉施設、栄養教諭、食品サービス業などです。卒業生を輩出するのはまだ先のことですが、栄養学科を担当する教員全員が一丸となって就職支援を行い、すべての学生が希望する就職先に勤められるよう努力してゆきたいと考えています。

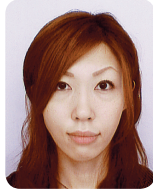


社会福祉学科3年就職ガイダンス

MESSAGE FROM GRADUATES

働きはじめて

藤田 沙野架
(看護学科5期生)



働き始めて気がつけばもう半年以上たってしまいました。去年の今頃を思い出すと、卒論や国試の勉強に追われながらも、とても楽しい生活だったと懐かしく思います。

私は今助産師として未熟児室で働いています。就職してからは、学生の時以上に勉強をしなければいけないし、責任も伴う。自分のケアや観察ひとつでも赤ちゃんの命に直結してしまうようなシビアな世界。日々プレッシャーと戦う毎日です。でもその分、やりがいも大きく、喜びもたくさんあります。術後とても状態が悪く先生たちみんなが諦めていた子が奇跡のように回復し今では自分で呼吸をして元気に泣いて口からミルクを飲むようになって…。正直やめたくなくなるくらい辛いこともあります。そんな子供たちに励まされ、癒されながら、助産師としてだけでなく人間として学ぶことが大きく、やっぱりこの仕事が好きなんだと実感し、看護・助産を学べて本当によかったと思っています。嫌なことは大学での友人や同期と発散させながら、これからも、楽しく、少しずつでも確実に成長していきたいと思いません。

MESSAGE FROM GRADUATES

PT4年目になって…

高橋 祐子
(理学療法学科2期生)



青森を離れ、地元大分へ戻って早くも3年半が経ちました。雪が積もる事のない大分で、冬になるといつも青森の雪を思い出します。

私の勤務する病院は、市唯一の総合病院であり、急性期から回復期、維持期さらには在宅まで担っており、リハビリもあらゆる分野に携わっています。特に内科分野は心臓リハ、呼吸器リハ、糖尿病リハに力を入れています。就職当初は内部障害についてはもちろんのこと、さまざまな知識も技術もなく、自分に何ができるのか悩む毎日でした。4年目を迎えた今、後輩も増え、業務にも

慣れてきましたが、患者さんに対しては未だに考え悩む日々です。

患者さんが高齢になるにつれ、主の疾患だけでなく、既に持っている疾患に対するリスク管理が大変重要になってきます。また、老老介護、一人暮らしといったその患者さんを取り巻く環境がその患者さんのゴールを左右する場合も多く、その患者さんにとって最善のリハビリ？ゴールは？といつも考えています。

まだまだ未熟なPTですが、患者さんやスタッフとの日々のやり取りを楽しみながら業務をしています。皆さん、大分の田舎ですが、九州に来た際には是非お立ち寄りください。(全国学会も楽しみにしています)

MESSAGE FROM GRADUATES

就職して思うこと…

飯田 侑季
(社会福祉学科5期生)



私が、ケアハウスの生活相談員として働き始め、早いもので半年が経ちました。就職してからの6ヶ月はあっという間に過ぎていきました。生活相談員は、利用者や利用者家族、多職種等様々な人とかわって行く機会がとても多いです。生活相談員としての、知識や技術が未熟なために、周りの人たちに迷惑をかけてしまうこともあり、自分自身がとても情けなく感じることもたくさんありました。そのような時でも、「どんなときでも笑顔でいること」を心に決め頑張ってきました。何か1つでもいいから、自分自身の中でこれだけは欠かさないというのを決め、それを継続して行う事が重要だと思います。実際に利用者から「あなたの笑顔見て、元気になった。」と言われたことがありましたが、このことは、私にとって大きな力になりました。つらいことや苦しいこともたくさんありますが、同じくらい嬉しいことや楽しいことがあります。そして、様々な人たちと出逢い、関わっていくことができる生活相談員はとてもすばらしい仕事だと思います。

これからも多くの壁にぶつかる時があると思いますが、笑顔を忘れず、利用者へ元気とパワーを与えていけるように、頑張っていきたいと思えます。

第12回日本難病看護学会 学術集会

会長（看護学科）石鍋 圭子

本学術集会は、「難病療養者のリハビリテーション—安全・安心そして可能性への挑戦」をテーマに、8月24日—25日、青森県立保健大学キャンパス内で開催されました。さわやかな晴天に恵まれ、全国から看護・介護の実践および研究者、難病療養者とその家族など約300名が参加し、熱心な議論が展開されました。

内容は、会長講演「難病ケアとリハビリテーション」から始まり、本学教授川村佐和子氏による特別講演、教育講演、公開シンポジウム、公開セミナーに加え、一般演題では46題の発表があり、充実したものでした。特に、公開シンポジウムでは、医療処置が常時必要な在宅療養者の生活支援に携わるチームのあり方について、看護・介護・当事者それぞれの立場から意見発表がされました。この中で、日本ALS協会会長の橋本操氏が、人工呼吸器を装着し、24時間態勢のサービスを利用しながら、各地を飛び回る多忙な生活を紹介した様子は、翌朝の東奥日報紙で報じられました。また、公開セミナーではケア付きねぶた実行委員会や、青森県難病団体等連絡協議会によるセッションが開催されました。このように本学会は、当事者と専門家が同じ場で議論する伝統があり、この度の青森開催は、本県の難病療養者とケアに携わる人々へ大きな刺激になったと考えます。

最終日、紙屋克子氏の教育講演Ⅱ「遷延性意識障害者の可能性を引き出す看護」では、看護の奥深さ・すばらしさを目の当たりにし、学会は感動で幕を閉じました。

開催に際して、本学の看護学科を中心とした学生諸君が若々しく誠意をもって運営に努めてくれたことに、多くの参加者から賞賛をいただき誇らしく思うとともに、本学会の企画・運営にご協力いただいた沢山の方々に、心から感謝します。



当事者をむかえての公開シンポジウム

日本家族看護学会第14回学術集会 看護における家族への実践

会長（看護学科）中村由美子

日本家族看護学会第14回学術集会は、2007年9月1日・2日の2日間にわたり本大学で開催されました。1994年に発足した本学会は今年で14回を迎え、人間にたとえるならば14歳という思春期の時期であり、大人、つまり更なる学会の飛躍にむかう大事な時期にあたります。そこで、「家族と育ちあう家族看護」をメインテーマとし、家族とともに家族看護の実践を発展させていくことを目指して、本学術集会は開催されました。約500余名の学術集会参加者の皆様と一緒に熱心な討議が繰り広げられていました。

会長講演では、「家族と育ちあう家族看護—家族看護実践の拡大に向けて—」をテーマに、医療の中で忘れられている家族に焦点をあて、技術的合理性にもとづく“技術的熟達者”から、行為の中の省察にもとづく“反省的实践家”へとその考え方を变化させ、家族と共に実践することを提案しました。特別講演における中京大学の鯨岡先生からは、「人は育てられて、育つ」というテーマのもと“祖父母、父母、子どもという世代間で循環する”ことを中心にお話していただきました。シンポジウムでは、地域や在宅、外来、臨床の場で行われている家族看護について、日頃から取り組んでいる皆様方の実践を中心にお話していただきました。家族へのヘルスプロモーション・疾病予防を行う専門家として、どのように家族看護実践を広げていくか、家族看護が広がりつつある青森から発信させていただき、盛会のうちに学術集会を終えることができました。

青森地域における家族看護の研修会は本大学を中心に1999年から始まり、今も続けられております。この学会開催が本県における更なる家族看護の発展に繋がることを希望しております。



会長講演

博士論文中間発表会について

研究科委員会教務学生専門部会委員 大串 靖子

本学大学院博士後期課程の平成19年度博士論文中間発表会は、平成19年7月20日(金)、16時10分～19時50分の日程で、本学教育研究C棟N講義室2において行われた。プログラムは、川村佐和子健康科学研究科長の開会挨拶、藤井博英研究科委員会教務学生専門部会長による発表にあたっての説明に続き、発表(質疑応答含め1人40分)が行われた。進行役は博士後期課程の発表者が交互に担当した。参加者は本学大学院、学部の教員、院生と学生、その他、客員教授の新道幸恵前学長、中村恵子前副学長、他大学の教員等が参加され、活発に助言・質疑応答が行われた。参加者数は1発表者あたり30名前後、延べ150名であった。

博士後期課程第1期生5名の分野および演題は次の通りである。

第1発表者 (看護学分野)

「療養上の世話」に関する介護職との協働によるケア提供の構造と看護判断基準の構築

第2発表者 (看護学分野)

在宅認知症高齢者の問題行動における主介護者の対処行動に関する研究

第3発表者 (生活健康科学分野)

生活習慣病発症リスク計算によるハイリスク者の階層化とリスク低減効果に関する栄養学的研究

第4発表者 (地域保健福祉学分野)

健康教室参加者の学びが家族や地域へ波及する現象についての探索

第5発表者 (看護学分野)

HIV/AIDS患者の継続受診の意思決定に関する研究



博士論文中間発表会の様子

「緊張」の体験は、「学び」の体験

大学院博士後期課程3年 原口 道子

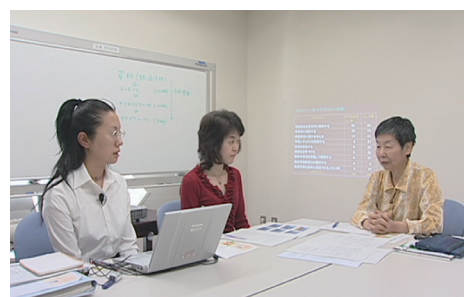
博士後期課程での研究活動が2年半になろうとしている時期に、「中間発表会」の開催が、予想以上に早く訪れました。

発表会の一番の目的は、専門分野の卓越した視点や他分野からの新鮮な視点の意見をいただくことで、今後の方向性の確認や軌道修正をするということでした。私は、研究テーマを熟考している間に、頭の中がそのことばかりになり、深い渦の中にはまって、同時に、周りが見えなくなっていくような感覚に陥っていました。そのような時期に、中間発表会を迎え、多くの意見・質問に回答していくことで、「何が見えなくなっていたのか」ということに気づかせてもらう機会となりました。多くの人の意見を聞くことは、同時に「自分の意見の位置がわかる」ということになり、とても貴重で、ありがたいことだと実感しました。

また、他者に適切な説明をし、理解してもらうことの重要性、難しさを感じました。論理的にわかりやすく説明するためには、一旦、はまった渦の中から「自分」を取り出し、「自分の研究」であっても、それを客観的に「見直す」「整理する」ということができなければならないと思います。このことは、大変な緊張を伴う場の中で「話す」という経験をしたからこそ、学べたことです。

もう一つの目的は、「仲間と会う」ということでした。博士後期課程の学生は仕事や遠方のため、あまり仲間と共有する時間が持てませんでした。論文作成の過程は、指導教授の指導はありますが、基本的には孤独で地道な作業が続きます。同じような状況にあり共感しあえる「仲間」に会える時間をとても楽しみにしていました。

このように、私は、ご参加いただいた先生方、仲間のお力により、これからの本格的なまとめのための英気を養ったのです。どうもありがとうございました。



ゼミの風景

てんかんと最新の脳解析

講師 大坪 宏 氏

理学療法学科では、カナダ・トロント小児病院の臨床神経生理部門部長大坪 宏先生（おおつぼ ひろし）先生を講師として招聘し、平成19年7月11日特別講義を開催しました。

大坪先生は、小児てんかんの診療と研究の第一線で長年活躍され、てんかんの電気生理学では、世界的に有名です。大坪先生のカナダ・トロントでの生活は18年に及んでいますし、彼はトロント大学の（小児）神経学の非常勤講師を兼任するとともに、信州大学医学部客員教授としてたびたび日本で講義をされる他、日本から多くの医師や医学生を受け入れて、てんかんに関する研究・臨床の指導を続けてきました。また、てんかん関連の国際雑誌に多くの論文を発表する他、多数の論文審査も行なっておられる、多忙な先生で、最近設立された世界臨床脳磁図学会のトップ10に入る理事の一人でもあります。以前から、大坪先生が日本滞在中にチャンスがあったら講義に来ていただきたいと思っていたのですが、なかなか日程が合いませんでした。今回は、7月第一週にマレーシアで行なわれた「てんかんの国際シンポジウム」に出席されたあと、日本（郷里の静岡）へ立ち寄られることを知り、急遽青森へ足を延ばしてもらう様をお願いして、大坪先生の特別講義が実現しました。

今回の講義は「てんかんと最新の脳解析」と題して、自らご経験された、小児てんかんの豊

富な症例をビデオとともに呈示しながら、その病因、診断、治療などをわかりやすく解説されました。最初のスライドでは、てんかんとてんかん発作の違いについて、またてんかんに対する考え方の歴史的変化についても述べられました。さらに近年の研究テーマであるてんかん発作に先立って生じる、脳の電気磁気的变化についても触れられました。英語の専門用語が頻繁に口をつけて出てくるので、学生にとっては講義内容についていくことが大変であったかも知れませんが、世界のトップレベルの学識に触れることができたことは貴重な体験と言えるでしょう。また、何よりもいろいろなてんかん発作を、ビデオと脳波同時に実際に観察できたことによって、将来そういう患者さんを目にしたときにもあわてることなく、対処できるのではないかと思います。まれなてんかん発作の1型として、夜間に大声で叫んだりする発作があり、脳波検査などが不十分だと一般には誤診されうるといふ指摘には、私自身も大変参考になりました。熱弁をふるった講義のあとは、てんかん発作を起こした患者さんを見たときに、①どう対処するか、②問診としてどのような内容を質問するのが良いか、という内容に焦点をあてた質疑応答が活発になされました。

（文責：理学療法学科長 尾崎 勇）

人権擁護とその制度について

講師 三上 富士子 氏

社会福祉学科では、社会福祉士の資格をもち、知的障害者更生施設さくら園の支援係長として障がいをもつ方々と日々関わっていらっしゃる三上富士子氏を講師に、7月20日(金)、「人権擁護とその制度について」と題する特別講義を開催した。

三上氏の勤務するさくら園は施設の方針として、利用されている方の「個人の尊重」「人権擁護」「社会への参加」「専門的な支援」を掲げ、快適な生活ができるようQOLの向上に努めている施設である。今回の特別講義では、さくら園における三上氏の実践経験を踏まえ、社会福祉専門職として利用者の人権を守ること(=権利擁護)の重要性と、その実現に向けた制度の現状と課題について語っていただいた。

まず講義の冒頭で三上氏は、自らの実践経験にもとづき、障がいをもつ利用者の方々と信頼関係を築くことの大切さや、社会福祉専門職として利用者の権利擁護を行う意義について話された。社会福祉の仕事は、3Kとも5Kとも言われる厳しい仕事ではあるが、「利用者のいのちと心を守る大切な仕事」であることが強調された。

次に、利用者の権利を守るための仕組みや制度について、制度化の背景・現状と課題を交えてのお話があった。社会福祉領域では、平成12年に社会福祉事業法が改正され、福祉サービスが措置から契約に変更されたことを契機とし、様々な権利擁護の仕組みが制度化されてきている。その主なものは「苦情解決制度」「第三者評価制度」「成年後見制度」「地域福祉権利擁護事業」である。

社会福祉士をはじめとする福祉専門職は、こうした権利擁護の仕組みを正しく理解し、それを実践現場の中で活用できる専門的力量をつけ

る必要がある。また、例えば、「成年後見制度」における成年後見人の主な職務として、財産管理と身上配慮(医療、住宅の確保、施設への入退所、介護、生活維持、教育等)があるが、成年後見制度は判断能力の乏しい人が対象となるだけに、後見人自身の「質」が大きく問われてくる。利用者の権利を守るはずの仕組みや制度が、逆に利用者の権利を侵す悲劇につながるものがないよう、専門職として絶えざる研鑽が必要となってくる。そのような意味で、実践者が専門職集団に加入する意義は大きく、三上氏が学生に向けて「卒業後は、是非社会福祉士会へ加入し、仲間とともに学ぶ機会を持ってほしい」と強調する所以であろう。

加えて、三上氏は、こうした制度活用以外の権利擁護の方法についても紹介され、例えば各施設における理念や倫理綱領の作成、マニュアルの整備、職員研修のあり方の検討など、日々の業務の中で工夫すべき点が多くあることも示唆された。

参加者のなかには、社会福祉学科の学生をはじめ理学療法学科、看護学科の学生もおり、社会福祉専門職の講義を受けることで、権利擁護に関する制度の現状と課題および青森県内の福祉現場の現状を知るよい機会になったものと思われる。

(文責：社会福祉学科長 大和田 猛)



三上氏のご講演の様子

平成19年度研究センター活動報告

研究開発科長 中村由美子

本年度からの新しい委員も加わり、研究センターも研究開発科委員会を中心に本学のさらなる研究の発展に寄与しています。研究センター事業は、①大学雑誌 ②研究集会 ③センター年報等 ④科研費対策等 ⑤産学官連携等の5つの主要業務にわけて担当し、学内での研究活動を推進するとともに、科研費に代表される外部研究資金の獲得に向けて、取り組んでおります。各活動について紹介すると、

1. 大学雑誌

昨年度の課題を踏まえ、今年度は雑誌印刷時のマニュアルについて印刷業者を含めて整備しており、魅力ある大学雑誌の発刊に努めている。

2. 研究集会

2008年2月15日に開催予定の「青森県保健医療福祉発表会」を青森県健康福祉部とともに準備中である。また、開学以来開催している「研究談話会」では、新任教員の紹介も含め本学教員の研究内容について発表していただき、教員同士の交流を図っている。

①	5/16	上泉 和子	青森県における包括ケアシステムの定着に向けて －医療機関における橋渡しナーズの評価に関する研究－ 新卒看護職育成のための、教育研修プログラムのありかたに関する研究
②	6/13	深谷智恵子 石田 賢哉	臨地実習教育に関する研究を中心に 地域で生活する精神障害の生活の質に関する研究 －作業所等を主な日中活動の場とする人たちの主観的QOLの視点から－
③	7/25	千葉 敦子	虚弱高齢者における包括的筋力トレーニングがQOLに及ぼす影響
④	9/12	岩井 邦久 大和田 猛	微弱発光測定による食品成分の抗酸化活性の評価に関する研究 グループホーム（認知症対応型共同生活介護）職員の認知症諸療法等の理解度と関連要因について
⑤	9/19	増山 道康 藤本真記子	社会福祉行政担当者の資質向上研修プログラム開発について フィジカルアセスメント技術実践能力獲得のためのOSCEシステムの開発
⑥	10/17	嵯峨井 勝 角濱 春美	住民基本データを用いた生活習慣病のリスク予測に関する研究 認知症高齢者の睡眠覚醒リズムの類別化と活動・覚醒を促すケアへの反応性の検証

3. センター年報

教育センターと連携してセンター年報を作成している。本年度はホームページに教員の研究紹介をA4版1枚程度で紹介し、広報を図っている。

4. 科研費対策

各種外部資金をサイボウズに紹介するとともに、科研費など外部資金の獲得に向けて、科研費への申請を促すポスターを作成するなどして広報活動を行っている。また、昨年度と同様に科研費のピアレビューを行うなど、申請件数の増加を図っている。さらに、今年度は公的研究費の適正な管理・監査の体制も整備している。

5. 産学官連携

現在8件の奨学寄附金があり、産学官連携を図るとともに、寄付を増やす努力をしている。本学の教員が実用化を図っているアピオスの研究が新聞社で紹介されるなど、成果は認められてきている。本年度は、本学の独立行政法人化も視野に入れ、「知的財産管理体制構築支援セミナー」を開催するとともに、弘前大学の「産学官連携フェア」の研究シーズにも出展し、産学官連携を進めている。



研究談話会



産学官連携フェア

青森の保健医療福祉の連携と実践力の向上のために

研修科長 渡邊 洋一

本学では、地域社会の特性や課題の把握に努めながら、包括的なヒューマンケアの実践力と連携を図るために、本学関係者と県内専門職の教育活動に取り組んでいます。特に、教員の教育活動の向上を目的として健康科学教育センターの研修科が設置されています。その事業内容を紹介します。

研修科事業の概要

教育センター研修科事業では、下記のような事業に取り組んできました。

- ① 教育改善研修事業 3件
- ② 研修企画実施助成 3件
- ③ ブックレット作成事業 3件
- ④ 第7回ケアマネジメントフォーラム IN 青森の開催
- ⑤ 学内研修会とフォーラムの開催
e-Learning 研修会の開催など
- ⑥ 地域交流型研修事業
- ⑦ 学外講座
- ⑧ 広報活動 パンフレット作成、ホームページ作成、センター年報

その他、社会福祉研修事業青森県トップセミナーと学内研修の共同開催



三浦文夫先生トップセミナーにて

前記したように、研修科公募事業として、教育改善研修事業、研修企画実施助成、ブックレット作成事業を前年度と同様に学内教員の企画を進めています。また、第7回ケアマネジメントフォーラム IN 青森を開催し、本学前教授伊藤

日出男講師を迎えて「介護予防活動と生活の質とリハビリテーションを考える」をテーマとして11月16日に実施しました。学内研修会では、教育の質の向上のために「e-Learning 研修会」講演会を実施し、教育改善研修事業でも二件のe-Learning 教材開発へ助成しています。教育センター研修科事業の全体では、教育センターのパンフレットの作成、ホームページの作成とあわせて、センター年報(研究センターと教育センター)を発刊します。

青森県社会福祉研修事業

社会福祉研修事業は、青森県では昭和50年から青森県社会福祉研修所が実施してきました。昨年から「青森県社会福祉研修事業」を教育センター事業として、本学が実施することとなりました。それは、社会福祉関係者の資質向上と、社会福祉主事資格取得の促進のために、次の二事業として実施しています。「社会福祉研修の一般研修事業」と「社会福祉主事の研修事業」です。

その目的は、社会福祉法第21条と第92条による福祉行政職員の訓練及び県内社会福祉関係者の資質の向上のために取り組むもので、最近の介護保険制度の改正や障害者自立支援法の動向など、社会福祉基礎構造改革によって大きな変革期となっており、より良い福祉サービスの提供のために資質の向上を図るものです。

展 望

少子高齢社会を迎えて、青森県の福祉課題の克服には、今後関係者の創意工夫が求められることとなります。そのような中で、教育センターの研修科では、開設以来取り組んできた各種事業を継続実施することとあわせて、新規事業の実施を企画して、研修機会を広く県内の専門職へと広めており、学内教員の研究の助長と、専門性の地域貢献の機会として周知がされてきました。この意味からも、大学の地域貢献の一環として、教育センターが果たしている成果が実りあるものとして進展しています。皆様のご協力をお願い申し上げます。

平成19年度国際科活動状況報告

健康科学教育センター 講師 川内 規会

本学の健康科学教育センター国際科は1999年に設立し、今年で9年になります。国際科の事業概念の構築がなされ、評価、改善を繰り返しながら、年々規模を大きくし、国際的視野を広げて参りました。国際科事業には学際交流・地域交流の二本柱がありますが、特にここ数年で着実に深みと広さが増してきているように感じます。

学際交流の分野では、アメリカの「Villanova大学との交流」が4年目を迎え、毎年十数名の看護の研修生と教員を受け入れましたが、今年度は、学内研修・学外研修・施設見学プログラム等がしっかりと形作られ、両大学間のみならず外部からも高い評価を受けています。また、韓国の「仁済大学校との学生交流」では、理学療法学科が中心となり、研修・施設見学・学生交流をはかってきましたが、2007年6月には両大学間で国際交流の協定が締結され、全学的な交流も可能となることで、その結びつきは深いものになることと思われます。現在でも両大学の理学療法学科の学生が来日および訪韓しており、さらなる発展が期待されています。

地域交流の分野では、フィリピンの「Mandaue市への発展途上国援助プロジェクト」が着実に進み、昨年度から、本学教員の視察訪問が行われています。このプロジェクトは、今後も地域の事業（NPO法人クオレ七戸障害者支援活動）と協力し、発展途上国支援に協力できるものと大きな期

待がかかっているところです。また、学生が国際的視野を深めつつボランティア活動に参加する機会を提供できるよう、インド（マザーテレサの家でのボランティア活動）・アジア方面に関する情報も提供しています。現在までに十数名の学生がボランティア活動の体験を通して専門分野の活動に活かしており、学生の積極的体験のサポートができる体制をこれからも整えていきたいと考えています。

本年度の地域交流事業には、JICAと共同で「あおり地球市民講座」を3回実施しています。アジアの国際理解をめざし、講演とワークショップを通して、県民に国際開発協力を深めていただくことを目的とした地域貢献に根ざした企画であり、学外からも注目されています。さらに、昨年度・一昨年度に引き続き3回目となる「地球のステージ」という公演では医師であり国際支援ボランティア活動を行っている桑山紀彦氏により、国際支援活動の紹介と生の演奏を披露することで、100名以上の来場者から大きな反響をいただいています。その他にも教職員・院生対象の「英語力増進クラス」、外国人学生対象の「日本語クラス」の開催や、本学の外国人教員による県内の「高等学校英語出張交流」なども実施しており、地域への異文化理解、言語学習の機会等も提供しています。

これからの国際科は学際交流・地域交流を主眼に置きながら、海外共同研究等を推進しつつ、さらなる国際的分野への発展を目指して拡大していきたいと思ひます。



Villanova 学生と本学学生（最終日）



Mandaue 中央学校の知的障害クラス



あおり地球市民講座（レヌカの学び）

公開講座実施報告

地域貢献委員会

本学では、県民の生涯学習や知識の向上を支援するため、一般の県民を対象とした、「公開講座」(基本テーマ「生活と健康」)を毎年開催しています。平成19年度においては、6月2日～7月28日にかけて、隔週の土曜日に計5回開催しました。

第1回目(本学大講堂)

- 「高血圧と活性酸素と食べ物のお話」
(人間総合科学科目 佐藤伸准教授)
- 「脳卒中、心疾患、がんを予防するために」
(人間総合科学科目 嵯峨井勝教授)

第2回目(本学大講堂)

- 「かしこい病院のかかり方」
(看護学科 鄭佳紅講師)
- 「少年非行への福祉施策」
(社会福祉学科 齋藤史彦講師)

第3回目(本学大講堂)

- 「訪問リハビリテーションの実際」
(理学療法学科 盛田寛明講師)
- 「手術後の一過性の認知障害をご存知ですか」
(看護学科 坂本祐子講師)

第4回目(本学大講堂)

- 「手術後に起こるむくみ改善のケア」
(看護学科 木村恵美子講師)
- 「地域で支える心の健康」
(社会福祉学科 大山博史教授)

第5回目(むつ市 下北文化会館)

- 「障害がある人の生活とリハビリテーション」
(理学療法学科 勘林秀行准教授)
- 「入院期間短縮の陰で」
(看護学科 深谷智恵子教授)

延べ合計数で、1,463名の受講者があり、受講者の皆様からも好評を得ることができました。



第4回目公開講座

eラーニングコンテンツの開発状況

人間総合科学科目 講師 浅田 豊

地域貢献諸活動における講演記録等のオンデマンド型ビデオストリーミング教材の製作段階を経て本学健康科学部の授業科目としては初めて、「教育と人間」においてeラーニングコンテンツの開発計画が進行している。昨年度は試行として対面型授業内容の連続する5コマの収録が完了し本年度は12コマの収録を予定している。コマ内容の確定は目標分析に基づく一般目標並びに概して「教育の意義や目的の考察」「学習指導方法の理解・説明」といった個別行動目標の設定、目標達成基準・評価方法の明確化、教授・学習過程の設定、コンテンツの精選という手順を経るものである。

撮影後の講義内容にはスライドまたは電子化を施したレジュメの画像及びビデオを補完的に挿入し、さらにアンケート・レポートを結合させることで、教材としての有用性が増すと考えている。また、体系的な講義の中に、教育者と学習者との双方向性を確保するためのエクササイズを必ず各コマに2問程度含めている。受講者は実際には、受信・学習中に問いへの解答を入力し、それを受けて速やかに教員からのチェック・サポートを行なっていく等の方法を目指すものである。同開発にあたっては、「自分の学習速度に応じて何度でも反復学習が可能」「時間・場所にしばられない受講の拡大可能性」等の学習上のメリットを最大限に生かす工夫、並びに「コンテンツ開発上の予算的・人的・時間的な負担度」「ITを活用した教育に関する教職員のスキルの向上・協力体制の整備」等の課題点を一つでも解決する方略を検討している。今後も、学生の学習ニーズに適合し、また本学の教育研究上の特色を生かした本格導入・充実した運営を視野に入れて、コンテンツ開発を継続したい。



コンテンツの撮影風景

より良き学生生活のために —保護者懇談会を通して—

学生委員会

平成19年度の「保護者（後援会）懇談会」が、大学祭初日の10月6日（土）に開催されました。保護者の皆様と大学との接点は、入学式時の後援会総会、年1回発行される「後援会だより」、広報誌「活彩！保健大学だより」等を通して、本学の現況や最新情報、年間の様々な行事・企画等を紹介するという本学からのお知らせが主です。懇談会は、本学教員より直接教育方針や教育体制、各学科での指導状況、課外活動、そして学生生活や就職支援体制を説明しご理解頂く機会として実施しています。保護者の皆様と膝を交えて親しく懇談することで、本学に対する率直なご意見・要望をお出し頂き、お子様に対する教育・生活支援の一層の充実を図ることを念頭に実施しています。

県内外より80名ほどのご出席を頂き、第一部：全体説明、第二部：学科別説明、第三部：個人面談を行い、学業、就職、大学生活全般についての具体的な内容やサポート体制について各学科より説明があり、担当教員と熱心に相談や情報交換がなされました。また、出欠席ハガキのアンケートでは多数の要望や提言、また感謝やお礼の言葉もお寄せ頂きました。これらの意見・要望につきましては、大学全体として直ちに対応できるもの、中長期的に対応していかなければならないものとして検討・改善していきたいと考えています。



保護者懇談会における学長あいさつ

後援会組織は本学の大使援団として、今後ともより一層のご協力、ご指導を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

電子ジャーナルを知っていますか？

図書館主査 小野 由美

電子図書館（Electric Library）ということばが最初に世に出たころ、図書館界では、紙媒体の資料＝図書や雑誌がこの世界からなくなるのでは！と大騒ぎしていました。すなわち図書館という建物が要らなくなり、みんなネット上で事足りてしまうからです。レイ・ブラッドベリの「華氏451度」という本の世界では、紙の図書を燃やすことが使命となった人のことが書かれており、司書にとって未来はつらいものになっていくように思われました。それはさておき、簡単には本はなくなるというのが現実でしたが、いまは紙媒体と電子媒体を有機的に利用できるようにする“ハイブリット・ライブラリー”が大学図書館のめざすところになっています。特に、電子化が著しい資料が雑誌です。一般の雑誌はまだまだ本屋さんや並んでいますし、立ち読みもできますが、学術雑誌では電子ジャーナルでの流通が主流になっています。大学図書館でも少しずつですが、電子ジャーナルを利用する環境を整えています。図書館のHPから利用することもできますし、医中誌WEBなどのデータベースでの検索結果から直接論文にリンクが張られている雑誌もあります。ネット上の雑誌も有効に利用して研究に役立ててみてください。

・利用できる電子ジャーナル（2007年現在）

メディカルオンライン	日本の医学系雑誌の電子ジャーナルの利用が可能、特に理学療法関係雑誌が充実しています。医中誌WEBから論文単位でリンクが張られています。
Cinii	日本国内の学協会誌や大学等の研究紀要の電子ジャーナルが利用できます。医中誌WEBから論文単位でリンクが張られています。
J-STAGE	日本国内の科学技術情報関係の電子ジャーナルが利用できます。医中誌WEBからも論文単位でリンクが張られています。
Nursing & Allied Health Source	看護系の外国雑誌の電子ジャーナルの利用が可能、医学関係の雑誌も掲載されています。CINAHLから論文単位でリンクが張られています。
図書館で購読している外国雑誌	紙媒体の雑誌だけでなく、一部の購読雑誌は、電子ジャーナルで利用可能です。図書館HPの“電子ジャーナル”＜洋雑誌＞リストから各雑誌のサイトにリンクが張られています。また、図書館蔵書検索(OPAC)にも電子ジャーナルへのリンクがあります。

本学見学・出張講義に関する活動報告

学生募集対策委員会

<キャンパス見学実績(H19.11.30現在)>

本学では、オープンキャンパス(6月)や夏のキャンパス見学会(8月)の他に、高校生の皆さんをはじめ、多くの方々にキャンパス見学の機会を提供しています。快適な教育環境、入門的な模擬講義、充実した教員数や設備、保健大生によるメッセージはとても好評で、本学を見学に来られる方は年々増加しており、本年度はこれまで以下の皆様にお出でいただいております。

【高校】木造高校(29名)、百石高校(32名)、大湊高校(23名)、七戸高校(38名)、青森高校(58名)、六ヶ所高校(57名)、鯨ヶ沢高校(24名)、岩木高校(35名)、田名部高校(72名)、黒石高校(40名)、野辺地高校(27名)、六戸高校(104名)、三戸高校(105名)【小中学校】七百中学校(44名)、三沢中学校(70名)、浜館小学校(14名)【保護者会】盛岡第四高校(39名)、青森北高校(30名)、聖愛高校(16名)、青森東中学校(30名)【その他】東津軽郡地方教育委員会連絡協議会(24名)



見学会風景(真剣な表情で説明を聞く六戸高校のみなさん)

<出張講義実績(H19.11.30現在)>

本学では、高校へのお出張講義にも積極的に取り組んでいます。今年度からは既存の3学科に加え、2007年度新設の栄養学科に関する出張講義も実施し、好評をいただいております。本県のみならず県外の高校からも講義依頼があり、本学への全国的な注目度がうかがわれます。本年度のこれまでの出張講義実績は以下のとおりです。

【県内高校】八戸南高校(58名)、三沢高校(32名)、木造高校(30名)、八戸高校(30名)、八戸東高校(43名)、青森北高校(32名)、青森戸山高校(189名)、青森南高校(55名)、青森東高校(80名)、八戸北高校(28名)、青森中央高校(25名)【県外高校】岩手県立盛岡第四高校(92名)、市立函館高校(66名)

保健大学では、2008年度の公立大学法人化を契機に、高校生をはじめとする多くの皆さんに本学の魅力を感じていただけるよう、さらに積極的に大学見学や出張講義に対応し、「2007年全入学時代」を迎え大学間の競争が激しくなる中、1人でも多くの方々に本学を志願していただきたいと考えています。

平成20年度入学者選抜試験のお知らせ(学部・大学院)

青森県立保健大学では、以下のとおり平成20年度入学者選抜試験を実施します。詳しくは、募集要項をご覧ください。

<お問い合わせ先>教務学生課入試担当 TEL:017-765-2144 FAX:017-765-2188 E-mail:nyushi@auhw.ac.jp

●一般選抜前期日程【学部】

募集人員	看護学科……………47名	出願期間	平成20年1月28日(月)～2月6日(水)
	理学療法学科……………16名	試験日	平成20年2月25日(月)
	社会福祉学科……………25名	合格発表	平成20年3月7日(金)
	栄養学科……………20名	入学手続期間	平成20年3月7日(金)～3月14日(金)

●一般選抜後期日程【学部】

募集人員	看護学科……………8名	出願期間	平成20年1月28日(月)～2月6日(水)
	理学療法学科……………募集なし	試験日	平成20年3月12日(水)
	社会福祉学科……………6名	合格発表	平成20年3月21日(金)
	栄養学科……………4名	入学手続期間	平成20年3月21日(金)～3月27日(木)

●博士前期課程(2次募集)【大学院】

募集人員	地域保健福祉学分野 理学療法学分野 生活健康科学分野 看護学分野 ※社会人特別選抜等を含む。	} ※10名	出願資格認定審査申請期間	平成20年1月4日(金)～1月11日(金)
			出願期間	平成20年1月21日(月)～1月25日(金)
			試験日	平成20年2月9日(土)
			合格発表	平成20年2月15日(金)
			入学手続期間	平成20年2月18日(月)～2月22日(金)

人事異動のお知らせ

<新任紹介>



人間総合科学科目教授 (H19.12.1付)
今 淳 (コン アツシ)

弘前大学から参りました。これまで保健大学の非常勤講師として臨床遺伝学の講義を担当しており、この度の御縁を感じております。抗加齢や遺伝病などが主な研究分野です。学生の育成に一生懸命努めてまいりますので、宜しくお願い申し上げます。



看護学科助手 (H19.10.1付)
市川 美奈子 (イチカワ ミナコ)

9月末まで看護師として働いていました。奇妙な縁あって、実践者から研究、教育者という立場になり、それを悩む間もなく実習が始まり、無我夢中でこなす毎日です。未熟者ですが皆さんどうぞよろしくお願いいたします。



健康科学研究センター助教 (H19.10.1付)
乗鞍 敏夫 (ノリクラ トシオ)

兵庫県から参りました。青森県民は日本一の早起きであるという記事を知りました。私は早起きが得意(年寄りみたいが目が覚めます)ですので、この記事を読んだ時に青森との運命を感じました。どうぞ宜しくお願い致します。



看護学科助手 (H19.10.1付)
佐々木 綾子 (ササキ アヤコ)

保健大学の1期生で卒業し、9月まで臨床で看護師をしていました。自分が指導していただいた先生方がいてとても心強いです。自分自身学びを深め、学生時代を思い出しながら頑張りたいと思います。



看護学科助手 (H19.7.1付)
村上 眞須美 (ムラカミ マスミ)

7月に青森県立中央病院から異動してまいりました。教育・研究は初めての挑戦です。これまでに無かった新鮮な体験に、毎日楽しく過ごしています。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。



社会福祉学科助手 (H19.10.1付)
種市 寛子 (タネイチ ヒロコ)

4回生として本学で4年間を過ごしました。助手となった今、多くの方の支えがあって学生生活を送ることができていたのだと実感しています。教職員・学生の皆さんとの関わりの中から学び成長していきたいと思っております。

[大学院科目等履修生募集]のお知らせ

科目等履修制度とは

社会人でフルタイムでの学習が難しい方や、興味のある特定の科目だけを勉強したいという方が、パートタイムで大学院の授業科目を履修することができる制度です。

単位修得ができます

学習成果について評価を受け、試験に合格すると単位を修得できます。この単位は、青森県立保健大学大学院に進学した際に既修得単位として認定を受ける場合(最大10単位まで)にご利用できます。将来的に大学院進学を考えている方にとりましては、そのための事前準備ともなります。

募集時期など

本学においては、通常、前期(4月入学)と後期(10月入学)の年2回募集します。平成20年4月入学生については、平成20年1月下旬から中旬に募集します。募集要項は平成20年1月中旬に配布します。

編集後記

本年のできごとがいろいろと思い出される年の暮れ、《活彩！保健大学だより》第17号をお届け致します。さて、皆さんは大学周辺の浜館付近で黙々とゴミ拾いをする年配の男性をご存じでしょうか。ある朝、本学駐車場でお見かけしたので御礼を述べると、にこやかな笑顔とともに返ってきた答えは「自分の健康の為に散歩がてらやっていることだから…」とのこと。ご自身の健康の為にとはいえ自主的に本学の環境整備をしてきている、そんな優しさに胸が熱くなりました。

来年度には本学も開学から10年という節目の年を迎えますが、その間、様々な形で地域の方々に支えられてきました。そうした方々の支援に応えるべく、本学の取り組む教育・研究がよりよい形で地域に反映されることを願って、取り組みの数々(下北地域を元気にする参画型教育、高大連携事業、仁済大学との協定締結等)を満載した《活彩！保健大学だより》第17号をご高覧いただきたいと思っております。

(広報記録委員/加賀谷真紀)



青森県立保健大学

〒030-8505 青森市浜館字間瀬58-1 TEL017-765-2000(代表)

編集・発行/青森県立保健大学広報記録委員会

大学ホームページ <http://www.auhw.ac.jp/>
(バックナンバーもご覧になれます。)